Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2016 ,Vol. 6 ,83-92　研究ノート

批判的思考力を育成するシンガポールの社会科授業

酒　井　喜八郎

Social Studies Lessons in Singapore Developing Critical Thinking Skills

SAKAI Kihachiro

キーワード：批判的思考力　グローバル化・出生奨励政策の授業　建設的立場討論　協同的な学習
小・中学校・大学（教師教育）

概要：本研究は、まず、これまで筆者が研究してきたシンガポールの多文化教育や新教科CCE（Character and Citizenship Education）教育の教科書・シラバス分析の成果と課題を明らかにする。さらに、わが国で21世紀コンピテンシーの１つとして注目されている批判的思考力の定義や論点を整理し、批判的思考力が、わが国の社会科で充分育成されていないことの理由を考える。一方、シンガポールの社会科では、2001年より継続的に批判的思考力の育成が目指されている。そこで、シンガポールの具体的な授業を参観し、分析、考察することにより、このような授業が可能な理由として、ポジティブとネガティブの両方の視点から考える建設的立場討論を取り入れていることや教員養成の制度との関わりがあるという一定の結論を得ることができた。

Ⅰ　はじめに

1　問題の所在

本研究で、シンガポールの批判的思考力を育成する社会科授業を取り上げ考察する理由は以下のとおりである。

第１に、シンガポールが短期間で教育立国となり、PISAなどの学力テストで世界上位、TIMSS（2013）では数学・理科１位の国であるが、新しく求められている21世紀コンピテンシーの１つである批判的思考力を、社会科授業ではどのように育成しているのかという問いである。

第２に、世界のシティズンシップ教育が注目される中で、シンガポールのシティズンシップ教育の１つである実際の社会科授業を批判的思考力の育成や学習形態から分析したものはない。

第３にわが国の教育に、グローバル化、情報化社会の中で、批判的思考力の育成が求められているからである。例えば、インターネットなどのメディアの一方通行の情報を鵜呑みにし、実際に丁寧に調べ情報を取捨選択し自分の推論を批判的に判断することができない。

このようなグローバル化・多文化化、情報化の中で、批判的思考力の育成をしているシンガポールの社会科授業の特質を明らかにすることはわが国の社会認識教育を考える上でも意義がある。

これまで酒井（2014）において、シンガポールの社会科シラバスと教科書を分析し、その特質を明らかにした。

ここでの知見は、第１に小学校シラバスが多様な人々への尊重があることである。第２に、シンガポールの中学校での多文化学習の教科書は、Why?（なぜ？）の形で記述され、世界の民族紛争問題を学んだ後に、自らの東南アジア地域における多文化の統合について、多文化社会を維持するにはどうしたらよいかを考える内容構成になっている。つまり多文化社会の維持について考える場合でも、それまでの他国の民族紛争問題を学び、根拠に基づいた上で考える。

日本と外国のつながりのある調べ学習を行い、その後、国連や、国際協力、地球環境問題を学習する流れの日本の多文化学習の構成とは差異が見られる。この考える力を重視した多文化教育の指導の流れは示唆に富む。

シンガポールでは小学校の基礎の上に中学校の

シラバスが作成され、系統的に考える力を育成する多文化教育が位置づけられている。酒井（2014）での課題は、シンガポールの教科書で取り扱う内容構成は明らかになったが、シンガポールの社会科が目指す21世紀コンピテンシーの１つである批判的思考力のスキルが、実際の授業でどのように育成されているかという方法面での分析や関連する内容の教科書分析が課題として残った。

さらに、酒井（2015）で、シンガポールの新教科であるCCE（Character and Citizenship Education）と社会科との関連を明らかにした。

図１は、21世紀コンピテンシーのフレームワークと児童の達成目標のフレームワーク（CCE2014シラバスp.１より筆者訳出）である。

これによれば児童にできるようにさせたいシティズンシップに関連したスキルの１つとして批判的思考が取り上げられているのがわかる。これはシンガポールの新教科CCE（Character and Citizenship Education）でも社会科教育シラバスにも同様にこの図が示されている。[1)]

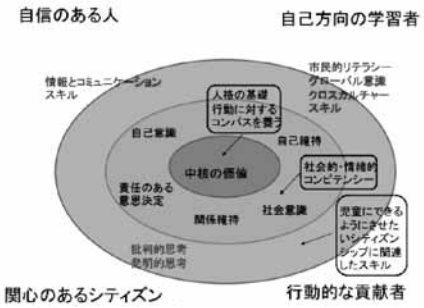

図１　21世紀コンピテンシーのフレームワークと児童の達成目標のフレームワーク
（シンガポール CCE2014 シラバス p.1 図を筆者訳出）

酒井（2015）では、シンガポールで2015年に作成されたCCE新教科書を分析したが、例えば小学校１年生で「話す前に聴く」という単元があり、そのメタディスコースとして「私は積極的に話を聴き、議論の間順番を考える時、チームのメンバーを尊重し、ケアしている。」とある。また「尊重して話しましょう」という単元があり、そのメタディスコースとして、「私は議論の間、特に反対意見が出たときも尊重して聴く」とある。つまり、小学校１年生で、建設的な議論をする上での基礎的なルールをCCEで教えようとしていることが読み取れる。

シンガポールの社会科授業の研究は、シラバスの分析（例えば、黒田（2007）、吉田正生（2010）、吉田剛（2011）、酒井（2014））などわずかである。またシンガポール国内の研究でもMark.C.Baildon & Jasmine B.-Y. Sim（2009）などである。海外研究の場合、シラバス・教科書・授業を分析することが社会認識教育の全体像を明らかにすることができる可能性があるが、その意味で、本研究はOECDのPISA調査で世界学力上位のシンガポールの実際の批判的思考力の授業について分析・考察することは意義がある。

最近、シンガポールの授業の報告もわずかではあるが見られるようになってきた（例えば、吉崎（2009）、サルカールアラニモハメドレザ・柴田（2012））が、教科は理科や英語であり社会科の実際の授業を分析したものは見られない。そこで、本論文では、これまで、CCE（キャラクター＆シティズンシップ教育）が登場するまでは最優先されていた考える力の育成を目指す社会科授業や関連する教科書を取り上げる。シンガポールの社会科授業の実際と、なぜシンガポールは、批判的思考力を育成する社会科授業が可能なのかという問いを明らかにし、その理由について一定の結論を出してみたい。

２　わが国における批判的思考力の育成の先行研究と学校現場の社会科授業

わが国は、グローバル化や高度情報化社会の中に巻き込まれ混沌とした社会となっている。

このような変化する社会に対応でき求められる力が批判的思考力である。

道田（2013）は、「何を信じ何をすべきかを決めるための合理的思考」と定義している。また、楠見（2014）によれば、「批判的思考力とは、論理的、分析的で証拠にもとづく偏りのない思考であり、自分の推論過程を意識的に吟味する反省的思考」である。さらに、楠見・道田（2015）によれば、「批判的思考は相手を非難することではなく、証拠に基づき論理的に考えること、自分の考えに誤りや偏りがないか内省することなどを意味

しており、膨大な情報を適切に読み解き活用できるリテラシーの基盤となる、現代社会の鍵概念である」、としている。筆者もこの定義に同意し、この批判的思考力を社会科で育成するのが大切と考える。

またアメリカの批判的思考力育成について研究している樋口（1999）は「批判的思考とは、情報の誤りや矛盾に気づいたり、合理的に意思決定し、かつその正しさを吟味できる力」としている。中野（2004）は、「適切な根拠や基準に基づく公平で偏らない態度を持った思考」としている。即ち、「批判的思考力とは、根拠や基準に基づいて論理的に考えると言ったスキルと公平で偏らないと言った態度「心的習慣、傾向」からなると考えられる」、としている。

さらに、社会科教育から見ると、児玉（2001）は「特定の歴史解釈を主体的に批判できる歴史思考力」と定義して、アメリカのスペイン内戦の授業を紹介している。土屋他（2009）は、「教科書が絶対的真理ではないとして、批判的思考は歴史教科書作成の前提の認識である」としている。渡部（2007）は、「批判的思考とは、自明なこととされていることに対して、当たり前とされていることが、実はそうではなく他の選択肢もあり得ることを認識するためそうした選択肢を視界から消し去るメカニズムを読み解く」と定義している。

一方、最近の海外の批判的思考力に関する研究では、渡部（2014）のMACOSの再評価の研究などがあるが、批判的思考力の育成はアメリカでは1940年代から市民性を高めるための教育として長年実施されてきた。また、Nasution・土屋（2010）によるインドネシアの批判的思考力を培う社会科授業の研究、などアジアの社会科授業の研究も見られる。しかしながら、このように批判的思考力の研究が増加しているのにも関わらず、実際のわが国の学校現場を見ると、体験的な学びについては、近年定着しつつあるが、批判的思考力の育成については、充分定着していると言いがたい。

その理由は以下の３点が挙げられる。

第１に、小学校の社会科授業の場合、社会見学などの校外学習などの体験活動は盛んだが、社会見学などの経験を省察する授業や、批判的思考力の育成を目指す討論授業など、じっくり考え市民的資質を育成する授業が少ないことがある。

第２に、小学校では社会科の評価があるが、学校現場の教師にとって知識理解の評価はしやすいが、批判的思考力の評価は難しいと考えられがちである。

第３に、楠見（2014）も指摘するように、批判的思考力などのようなジェネリックスキル（汎用的能力）の育成やその評価を視野にいれた授業設計がこれまであまり考えられてこなかったこともある。

それではPISAで上位で、ATC21S[2]などで注目されるシンガポールはどうであろうか。シンガポールでは、社会科という教科においても、批判的思考力を育成する授業形態が実施され、教育システムが確立されているのではないかという作業仮説が立てられる。

この仮説を立てた理由として、シンガポールでは、1999年のゴー首相の演説を受けて、2001年より（TSLN：Thinking School Learning Nation）「考える学校、学ぶ国民」の教育を行ってきたということがある。考える学校とは、創造的思考力を伸ばし、生涯にわたって学ぶ意欲を持たせ、国への参加意識を高めることができる学校システムで、学ぶ国家とは、社会のあらゆるレベルで創造力が発揮される学習ビジョンである。この2001年から現在までのおよそ15年間のシンガポールの思考力を重視した教育の成果が、シラバス、教科書、及び今回の授業参観を通して顕在化できると考えた。

わが国の社会科は、ともすれば暗記教科ととらえられる傾向がある。社会科がスリム化し、最後に残るもの、それは、＜批判的思考力＞であろう。なぜ、日本では社会科教育で批判的思考力が育成できないのだろうか。どうしても現実の小学校現場では、社会科＝暗記、社会科＝校外学習、体験学習、社会科＝黒板をノートに写す授業、というステレオタイプに陥りがちである。

今後は、グローバル化、情報化が進むわが国でももう１度社会科で育成したい学力の１つである批判的思考力の育成について、その内容や学習方法について考える必要がある。

本論文では、シンガポールの批判的思考力を育成する社会科授業の観察と分析を通して、シンガポールの批判的思考力を育成する社会科授業の特質を明らかにし、なぜそのような授業が可能なのか理由を考え、わが国の批判的思考力を育成する社会科授業へ示唆するものについて考察をすることを目的とする。

3　研究の方法

2013年３月にシンガポールの小・中学校、大学(NIE) の授業を参観する機会を得ることができた。

(1) 本研究では、実際の中学校の社会科授業と大学の社会科教育法の授業を分析した。

(2) 次に、この授業内容に関連する教科書内容を分析した。

(3) 最後にNIE（National Institute of Education：国立教育学院）[3] の担当者に半構造化インタビューした。

Ⅱ　シンガポールの批判的思考力を育成するＡ中学校の社会科授業事例

この研究対象の学校は、シンガポールの中心部から郊外に位置する中学校である。(2013年３月参観）シンガポールは４学期制であり、筆者が参観した授業は、２学期に実施された。第１時から第３時までの３つの授業を観察することができた。通常、授業参観は難しいがNIEの好意で実現した。この３つのうち２つの社会科授業事例を考察する。

1　社会科授業事例１「グローバル化」

①授業の目標：シンガポールにおけるグローバル化のメリットとデメリットについて話し合い考える。

②授業の内容

教師はグローバル化の授業で、まず、ASEANの中のシンガポールのハブの位置の重要性を強調していた。

次に、グローバル化のメリットとデメリットについて、グループでの話し合い学習が持たれた。

③授業方法

パワーポイント、協同学習、建設的立場討論

④子どもたちのディスコースの分析

表１はＡグループの子どもたちがこの話し合い学習の後に、Ｂ紙にまとめた内容である。この授業で、各グループが、作成した４つ切り画用紙に書いた内容の１つである。まず、Ａグループの子どもたちは、飛行機の材料がどこの国から来ているかを調べていた。そして、飛行機の絵を描いて、尾翼の部分はアメリカ製、エンジンは日本製など飛行機の素材が、各国の素材で構成されていることを言おうとしている。つまり、飛行機の部品に着目して、相互依存の関係にあることを発表した。

表１：Ａグループが話しあってＢ紙にまとめた肯定的な意見と否定的な意見

(賛成)
・外国の文化に関しての増加する意識
・世界中の人々の成果様式や文化、歴史についてよりよく学べるから
・人々が、異なる文化や異なるものから学ぶことを受容することを評価し始めていること
・社会が、さらに多様な社会になっていること
(反対)
・地方文化の欠如
・外国の国々が、残された世界に、自分たちの信条や文化を押し付けるようにみえること
・人々が、自分たちのアイデンティティや、自分たちの文化への関心を失ってしまうこと

このＡグループの発表資料を見て、次のことが考察できる。賛成の立場の意見から、多文化共生についての意識を根拠付ける意見が読み取れる。また反対意見として、自分たちのアイデンティティや文化を失うことと書いている。グローバル化のプラスの影響とマイナスの影響を両方の視点から考えている。

表２：Ｂグループが話しあってＢ紙にまとめた肯定的な意見と否定的な意見

(肯定的)
・グーグル；速い情報
・スカイプ；ビデオインターフェイス
・ユーチューブ；フリーサービス
・航空券、本の注文；オンラインショッピング
(否定的)
・間違った情報
・スキャン、ウイルス

Ｂグループは、グローバル化の中でも、情報化社会におけるインターネットの肯定的な意見と否定的な意見を2つに分類して話し合って書いている。特に、情報化社会におけるインターネットにより航空券の注文が簡単にできたり、音楽を聴くことができたりする点を、生活が便利になった利便性と関わらせており、一方で、間違った情報が一方的に流されたりするというマイナスの部分や

ウイルスの弊害なども整理したりしていることがわかる。

表３：Ｃグループが話しあってＢ紙にまとめた肯定的な意見と否定的な意見

（肯定）
・アイフォンのようなデバイスを使用することができる。
・インターネットを通して文化を理解することができる。
・インターネットから瞬時に情報を得ることができる。
・インターネットを通して、ビジネスマネージャーは、自分たちの製品を販売し宣伝できる。
（否定）
・人々との交流が少なくなる。
・地方文化の喪失
・あまり図書館に行かなくなる。
・メディアの悪影響

Ｃグループは、インターネットがビジネスにおいて製品の販売や宣伝を促進することを述べているが、一方で人との交流が少なくなったり地方文化の喪失が起こったりすることを指摘している。

このように、授業の分節の短時間ではあったが、グループごとにグローバル化社会における肯定的な面と、否定的な面を、どのグループも話し合い、上手く整理していた。

⑤考察

この「グローバル化」の社会科授業において、次のようなことが考察できる。

第１に、この社会科授業で、教師は、グローバル化と東南アジアのハブとしての地理的な位置の重要性をパワーポイントを使用して教えた。

グローバル化が進む状況の中で、貿易立国としてのシンガポールにおいてグローバル社会に対応できる経済人を育成するねらいで、この授業が位置づけられている。

第２に、各グループの発表に見られたように、グローバル化の問題を、グローバルな情報化社会の問題としてとらえ、生徒たちに身近なアイフォンなど携帯端末の発達によるメリットとデメリットの両方から考える意見があった。

参観したシンガポールの社会科授業でよく見られた建設的討論は、メリットとデメリットを明確にしながら討論する形態が特徴である。[4] 特に、情報化社会の問題についてポジティブな視点からとネガティブな視点からの両方からの討論は、シンガポール社会においても日本と同様の社会問題を抱えており、どの国も情報リテラシー教育における批判的思考力の必要性が課題であることを再認識させられる。

２　社会科授業事例２「出生奨励政策」

①授業の目標

シンガポールの少子高齢化による出生率低下の問題とベビーボーナスという出生奨励政策について知り、自分たちだったらどのように使うか、最終的にこの制度に賛成か反対か考える。

②授業の内容

この授業では、シンガポールの出生率の増加のために、政府から給付金が支給されることに対して、グループで話し合い、給付金を何に使用するかについて画用紙に書き出した。次に、この給付金制度に賛成か反対かを決め、話し合いながら理由を書いていく。それをグループごとに発表するものであった。グループ発表では、実際の給付金の資料を使って、紙おむつやミルクを買うなどのシミュレーションが行われた。

中学生たちは、実際のベビーボーナスの給付金の額から、赤ちゃんのために何を買うかをグループで協同して考えた。

③授業方法

パワーポイント、シミュレーション、協同学習、建設的立場討論

④考察

この授業では、シンガポール政府の出生奨励政策としてベビーボーナスを取り上げていた。

表４は2013（当時）のベビーボーナスと2015以降のベビーボーナスである。[5]

表４：シンガポールのベビーボーナス

ベビーボーナス	2012年8月26日から	2015年1月以降
1番目と2番目の子ども	6000ドル	8000ドル
3番目と4番目の子ども	8000ドル	10000ドル

シンガポールは日本と同様に深刻な少子高齢化に直面しており、出生率1.2（2013年）で出生率の低下による少子化は切実な問題である。シンガポールでは、人的資源は重視されているが、能力主義が少子化に強い影響を及ぼしていると考えられる。

この授業事例２は以下の点でシンガポールの社会科授業の特質を表しているといえる。

第１に、現在のシンガポールの社会問題としての出生率低下の問題を取り上げ、ベビーボーナスというシンガポールの政策について、生徒たちにとっても身近な生活との関連で授業が展開されており、「もし出生奨励金をもらったらどのように使うか。」という具体的な学習課題が提示されたので生徒たちが意欲的に取り組むことができていた。

第２に、シンガポール政府の政策について考えるためにシミュレーション活動を組み込むことで子どもたちが参加しやすく協同で取り組めるような工夫をしていた。実際に、政府の政策について、政府から出生奨励金をもらった場合、どのように使うかという課題であったため、生徒たちは、補助金の使い道を具体的なシミュレーションで学ぶだけでなく、最後に、この制度の是非を資料に基づき協同して話し合うことで批判的思考力の育成がなされていた。

第３に、Ｂ紙に具体的な出生奨励金を何に順番に使用していくかをグループで考え、話し合う協同的な学習スタイルがとられていた。

３　中学校３年用教科書（経済教育）の内容分析

この授業からシンガポールの経済教育の授業内容に関連すると思われる教科書の内容構成を分析考察する。

表５：中学３年社会科教科書の裏表紙の記述 ALL ABOUT SOCIAL STUDIES SECONDARY 3 COURSE BOOK 6)

ALL ABOIUT SOCIAL STUDIES NORMARL SECONDARY
SCHOOL COURSE BOOK MANAGING OUR Financial Resources hase been developed to encourage students to explores Imporatnt issues in Singapore.
It is designed to help students enjoy Social studies through enriching activities.
That will promote self-directed and collaborative Learning.
It also helps students develop Creative and Critical thinking skills.
「私たちの金融リソースを維持という教科書は、生徒たちにシンガポールの重要な社会問題について考えることを奨励するために作成された。
個人だけでなく、協同的な学びを促進する。
また、創造的、かつ批判的思考力のスキルを発達させるのを助ける。」

表５に示すように、この金融リソースをマネージメントするという教科書の裏表紙には以下の記述がある。「生徒たちにシンガポールの重要な社会問題について考えることを奨励するために作成された。個人の学びだけでなく、協同的な学びを促進する。また、創造的、かつ批判的思考力のスキルを発達させるのを助ける。」とあり、批判的思考力の育成をねらった社会科教科書であるといえる。

次に示す表６はシンガポールのこの社会科教科書の単元の内容を訳出し、それぞれの内容をコードで分類したものである。

表６：シンガポールの社会科教科書の単元の内容とコード分類

単元名	内容のコード
私のお金を維持すること	ポジティブな視点
必要対欲しい	ポジティブな視点
私の必要と欲しいとは何か？	ポジティブな視点
予算	ポジティブな視点
予算とは何か	ポジティブな視点
なぜ予算計画がひつようか	ポジティブな視点
どのようにして予算計画を立てるか？	ポジティブな視点
どのようにして予算計画を保つか？	ポジティブな視点
何が貯蓄でなぜ貯蓄が必要なのか？	ポジティブな視点
どのようにして貯蓄するのか？	ポジティブな視点
利息とは何か？	ポジティブな視点
Central Provident Fundとは何か？なぜそれが必要か？	ポジティブな視点
私のお金を成長させること	ポジティブな視点
お金を稼ぐことと収入の違いの何が異なっているのか？	ポジティブな視点
投資	ポジティブな視点
投資とは何か？	ポジティブな視点
私の教育において投資とは何を意味するのか？	ポジティブな視点
私のお金を賢く使うこと	ポジティブな視点
きみは浪費していないか？	ネガティブな視点
異なった浪費の習慣とは何か？	ネガティブな視点
どのようにして私自身浪費するか？	ネガティブな視点
どのようにして私のお金を賢く使うか？	ネガティブな視点
人々はギャンブルをするべきか？	ネガティブな視点
ギャンブルとは何か？	ネガティブな視点
なぜ人々はギャンブルをするのか？	ネガティブな視点
ギャンブル問題の影響とは何か？	ネガティブな視点
国家予算	ポジティブな視点
国家予算の紹介	ポジティブな視点
国家予算とは何か？	ポジティブな視点
正負の歳入と歳出	ポジティブな視点
どのようにして国家予算は私に影響を与えるのか？	ポジティブな視点
何にシンガポール政府は予算を使っているか？	ポジティブな視点

これによれば、全てWhat?（何？）Why?（なぜ？）How?（どのようにして？）のように問いの形で記述されていることがわかる。また身近なお金の使い方から始まり国家予算の使い方の話に至っている。つまり、シンガポールの教科書では、経済教育に絞って身近な個人から最終的に国家の予算を考えるという内容構成になっており、グローバル経済社会の中でのASEANのハブの位置にある国家として経済教育に重点を置いていることが読みとれる。

また、身近なお金の使い方から国家予算の使い方に単純に至るのではなく、お金を賢く使うことの単元で、＜お金の浪費＞、＜ギャンブル＞というネガティブな面という反対の視点で考えることで、より建設的な議論ができ、批判的思考力を育成するような内容構成になっている。

つまり、金融の問題をポジティブな視点からだ

けでなく、ネガティブな面からも考えるところが、シンガポールの批判的思考力を育成する経済教育の特質であることが推測される。またお金を稼ぐことと、インカム（収入）の違いや、投資という概念を金融だけでなく、教育の投資という視点からも考えさせようとしている点が興味深い。

シンガポール社会科授業の観察と教科書分析の結果を以下のようにまとめることができる。

①パワーポイントによるスライド提示型による授業が行われる。教師が、写真や、自分の教えたいことをスライド作成して準備している。教師がかなり事前に準備して、パワーポイントによる説明から建設的立場討論の流れで社会科授業を進めている。

②建設的立場討論（ポジティブ・ネガティブの視点）

授業では、ポジティブ・ネガティブ、または、長所・短所というように学習問題を対比して考え話し合うスタイルがとられる傾向が強い。協同的な学習が重視されている。同様に、シンガポール教科書の内容構成においても、ポジティブな視点とネガティブな視点の２つの反対の視点から分析するように記述されており、より社会認識が深化するようになっていることが明らかとなった。

③資料

教師自身が作成した資料だけでなく、Ministry of Education（シンガポール教育省）の方から、無償でトップダウンで配布される教材もある。

Ⅲ　教師教育を行う大学での社会科教育法の授業
－NIE（National Institute of Education）の社会科教育法授業「グローバル化」

１　南洋理工大学とNIE

南洋理工大学は、1955年に設置されたシンガポールにある国立大学のひとつである。2002年現在で、シンガポールには、国立・私立合わせて３つの大学がある。（シンガポール国立大学、南洋理工大学、シンガポール経営大学の３つである。）2015－2016世界大学ランキング（QS　World University resouses）では、南洋理工大学（13位）に対してこれまで、アジア圏でトップだった東京大学（43位）は後退している。シンガポールの西方に位置し、200ヘクタールの広大な敷地の中で23500人の大学生と、10000人の院生が学んでいる。この敷地内にNIEがある。この中の人文科学系の講座の小学校教員社会科教育法の授業：Structured Acadmic Controversyという授業を参観した。このStructured Academic Controversyという学習方法は協同的な学習の研究者であるミネソタ大学のDavid and Roger Johnson（1988）により、教室のディスカッションを構成し、焦点化するために考案された。２人ペアか、４人のチームで読みながら問いを考え、対立する立場によりプレゼンを行う。後で生徒たちはディスカッションしながらコンセンサスに到達する。

２　大学での社会科教育法の授業

①授業の目標：Structured Acadmic Controversyを通して批判的思考力を育成する。

②授業の内容

グローバル化について、まず、教師がパワーポイントを使用して経済的な側面から検討する。

次に、グローバル化は、自分たちに有益であるか、害を及ぼすかについて、協同で学生たちは、①有益であるという立場と、②害を及ぼす、という２つの立場のグループに別れ、ディスカッションする。

③授業の方法

パワーポイント、グループ学習、建設的立場討論

④考察

このように、シンガポールは、資料を使いグループでディスカッションし協同的に学習するという授業が多く見られた。これは、小・中学校だけでなく、大学の授業でも同様であった。つまり、現職教員に教師教育を行う大学でも、グローバル社会における問題を扱い、このような建設的立場討論のスタイルの社会科授業が実施されている。徹底的に、批判的思考力の育成をねらい、賛成、反対の両方の立場で討論が実施される。

これまでの分析から、シンガポールでは、小・中学校・大学一貫した授業研究がなされていることが推測できる。

Ⅳ おわりに

これまで、筆者は中学校・小学校の両方の教職経験があるが、わが国の社会科は批判的思考力について授業レベルでまだ充分学校現場で浸透しているとは言いがたい。今後のわが国の未来社会を構築する担い手を育成するためには、批判的思考力はキーワードの１つである。また、小・中・大学（NIE）の教師教育まで一貫して授業を参観する機会を得たことで、より系統的な視点から俯瞰してシンガポールの批判的思考力を育成する社会科教育を考察することができた。授業から見たシンガポールの批判的思考力を育成する社会科教育の特質は以下の３点にまとめることができる。

第１に、観察したシンガポール社会科授業は全てなぜ疑問が多く問いの形で進められ、探究的に構成されていた。また、グローバル化や出生奨励政策など身近な社会問題が取り上げられていた。

第２に、教育省のシラバスや教育内容がトップダウン型で浸透していることである。実際の授業を参観する機会を得たことで明らかになったのは、批判的思考力というスキルを育成する授業形態である。例えば、小・中学校だけでなく、教師教育を行う大学まで、批判的思考力を培うために、一貫してグローバル化について、ポジティブとネガティブの視点から建設的立場討論する授業が行われていた。また関連すると思われる教科書の内容をコード分析したところ、やはり、同様にポジティブな視点とネガティブの視点から考えるような批判的思考力育成を目指す内容構成になっていた。

第３に、今回の授業参観とNIEのインタビューから、このような授業が可能なのは、NIEでの教師教育との関わりが大きいと推測される。

これらの３点が今回導き出された重要な知見であり、今後は、特に教師教育との関連で考察していくことが必要であり、課題である。

本研究は、わが国の新しい21世紀のコンピテンシーの１つである批判的思考力を育成する社会科教育を考える上でも示唆に富む。今後の日本とシンガポールの授業研究（Lesson Study）による未来志向の知的な交流に期待する。

（謝辞）

本研究は、平成25年度日本学術振興会科学研究費（奨励研究）の成果の一部である。シンガポールの小中学校を訪問し社会科授業を観察する機会を与えてくれた B.-Y. Sim Jasmine（NIE）と大学の授業を見せて頂いた経済教育のBarbara Schneider（NIE）をはじめ、NIEのスタッフ及び学校関係者に感謝したい。

＜註＞

1）Wing On Lee（Dean of National Institute of Education）は、シンガポールの将来の方向に向けたシティズンシップ教育について9th.Citized.国際会議（座長：池野範男（広島大学）、水山光春（京都教育大学））の基調講演で、シンガポールでこれまでの社会科での考える力（批判的思考力）の育成を基礎にして新教科CCEがスタートすることを述べている。
Wing On Lee（2013）Future-oriented Citizenship：A possible Citizenship Model Starting from the Case of Singapore p.p. 43－54. *East And West in Citizenship Education：Encounteres in Education for Diversity and Democracy Programme and Abstract Book.*

2）Assessment and Teaching of 21st Century Skillsの略。Griffin, McGaw, & Care（2012）に21世紀型スキルについて述べられている。シンガポールもこのATC21Sの５か国の１つである。

3）NIE（National Institute of Education）：国立教育学院は、シンガポールの教師教育機関である。以下、NIEとする。

4）立場討論の一種で、日本でも建設的討論法と呼ぶことがある。立場のチェンジがあり、両方の立場を味わった上で、そこから建設的意見を導きだそうとすることが多い。ディベートも立場討論であるが、ディベートはひたすら勝負を競い、本音以外で議論するのであざとくなりやすい。勝ち負け優先のディベートより、相互理解を促す建設的討論の方が子ど

もたちにとってはより良い学習形態と考える。

5） Ministry of SOCIAL AND FAMILY DEVELOPMENT によるホームページ参照。
www.babybonus.gov.sg

6） シンガポールの授業参観の時、教科書は使用されていなかったが、2014年版であるが、この授業内容に関連する教科書が入手できた。中学校３年生用の経済の教科書であり参考となると考えられるので分析対象とした。

＜引用文献＞

・楠見孝（2014）「「批判的思考力」と大学教育」IDE
・楠見孝・道田泰司 編（2015）『ワードマップ批判的思考－21世紀を生きぬくリテラシーの基盤』新曜社
・黒田明雄（2007）「シンガポールの社会科教育の特質に関する一考察－初等社会科シラバスの分析から」『倉敷芸術科学大学紀要』第13号, p.p.181－192.
・児玉康弘（2001）「中等歴史教育における解釈批判学習の意義と課題」『社会科研究』No.55, p.11.
・酒井喜八郎（2014）「シティズンシップを育成する多文化教育」『地理教育研究』 No.14, p.p.52－59.
・酒井喜八郎（2015）「シンガポールにおけるCCE（人格・市民性教育）の内容と特質－シラバスと教科書分析を中心に」『社会系教科教育学研究』 No.27, p.p.91－100.
・サルカールアラニモハメッドレザ・柴田好章（2012）「海外の授業から：シンガポール中学校１年理科「いろいろな物質」」『考える子ども』No.347, p.p.27－43.
・土屋武志・土屋敦子（2009）「批判的思考力を育成する歴史教科書－ 帝国書院版『社会科中学生の歴史』を例に －」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』No.12, p.p.167－173.
・中野和光（2004）「批判的思考を指導する授業方法に関する一考察」『福岡教育大学紀要』No.53, p.p.79－84.
・Nasution・土屋武志（2010）「批判的思考力に基づく歴史教材・授業モデルの開発－インドネシアの事例を基にして－」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』No.13, p.p.111－118.
・樋口直宏（1999）「J.デューイにおける「批判的思考」の概念－How We Thinkを中心に－」『教育方法学研究』No.13, p.p.49－68.
・道田泰司（2013）「批判的思考教育の展望」『教育心理学年報』No.52, p.p.128－139.
・吉崎静夫（2009）「初等・中等・高等教育における教育方法の改善・開発に関する総合的研究」『科学研究費報告書』
・吉田剛（2011）「ナショナルシティズンシップ育成のためのシンガポール小学校第3学年の内容－スキームオブワークと評価ガイドラインまでの事例分析－」『宮城教育大学附属国際理解教育センター年報』No.８, p.p.59－71.
・吉田正生（2010）「ナショナル･エデュケーション下のシンガポール初等社会科に関する一考察」『北海道教育大学紀要』No.44, p.p.101－111.
・渡部竜也（2007）「批判的思考力を育成する地図学習の単元開発」『教育学ジャーナル』No.3, p.p.49－58.
・渡部竜也（2014）「米国における「批判的思考」論の基礎的研究（Ⅱ）」『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅱ』No.65, p.p.１－22.
・*ALL ABOUT SOCIAL STUDIES SECONDARY 3 COURSE BOOK* － Managing Our Financial Resources（2014）Pearson Education South Asia Pte Ltd.
・David W.Johnson & Roger T.Johnson（1988）Critical Thinking Through Structured Controversy *EDUCATIONAL LEADERSHIP* p.p.58－64.
・Griffin, McGaw, & Care（2012）*Assessment and Teaching of 21st Century Skills：Methods and Approach* Springer p.310.
・Mark C. Baildon & Jasmine B.-Y.Sim（2009）Notions of Criticality Singaporean teachers' perspectives of critical thinking in social studies *Cambridge Journal of Education* Vol. 39, Issue 4 p.p.407－422.

Summary

This study analyzes multicultural education and Character and Citizenship Education (CCE) to clarify their present status and scope.

The author reviewed mainly Japanese research on critical thinking and examined why critical thinking is not well developed in Japan.

In contrast, Critical Thinking is emphasized in Social Studies in schools in Singapore.

Therefore, the author observed and analyzed actual lessons in secondary school as well as teacher education lessons in National Institute of Education (NIE) in Singapore.

Not only that, but also the author analyzed Social Studies Secondary School 3rd grade Course Book (Economy education).

Consequently the study concludes that it is vital to emphasize Structured Academic Controversy and critical thinking skills, and that these are influenced by the teacher education system.